婦人と子ども

第四卷第三號

生命の水

やまとの翁

むかしく、まづある處に、一人の殿樣がありましたが、ある時のこと、ひどい御病氣になられて、もー、誰が見ても、とても、助からないと思はれる

位の大病で、皆が、大變心配をして居りました。

所が、此殿樣に三人のお子さんがありまして、お父っさんが、だん〳〵とおわるくなって行くのを見て、もー〳〵悲しくて堪りませんから、或日の夕方、三人で、そーっと、裏のお庭へ出て、そこで思ひ入り、泣いて居りました。すると、そこへ、一人の老翁さんが出て來て、なぜ、そんなに泣いて居るかと言って尋ねましたから、三人口を揃へて、お父っさんが、病氣で、もー今に、死ぬかも知れないから夫で歎いて居るのだと答へました。すると、其老翁さんが言ふには

『夫は氣の毒なことぢや、私が其病氣を助かる工夫を知って居るから、敎へて上げよー』

『エッ、病氣の助かる工夫ですって？

と、驚喜の餘り、三人一度に叫びました。老人はおちついて、

『そーじゃ、先づ生命の水を一口飲むと、夫であの病氣は、すぐ直るのじゃ、けども、夫を探すのが、一寸六ケ敷しいて』

と言ふかと思ふと、其老人の姿は、かき消す樣になくなって仕舞ひました。

偖は、常に信心する神樣のお告げに違ないと、喜んで、三人は急いで、殿樣の御病所に戻りました、夫から、一番の兄さんの太郎丸が、第一番に殿樣に申し上げて、之からすぐ生命の水を取りに參りますから、暫らくお暇を下さいと願ひました。所が、殿樣は中々宥して下さらない。

『イーヤ、夫は危いから、廢すのが宜からう、己は、夫よりかいっそのこと死ぬるから』

と仰っしゃるのです。

然し、太郎丸は、強って願って已みませんから、殿様も、夫程迄に孝行なのならばといふので、とーくお宥しをくれました、然し、皆さん、太郎丸は、果して、眞實の孝行から生命の水を取りに行きたかったのでしよ！か、いーえ、そーではありません、太郎丸は、こー考へました、

『もしも一番に己が生命の水をお父さまに持って來て上げることが出來たならば、お父さまは三人の中で、第一に己を可愛がってくれるに違ない、夫から、なくなった後では、すぐ己を後取りにしてくれるにきまって居る』

まあ、こんなよくない考を持って居たのです。

さて太郎丸は、御殿をでゝ、だん〳〵道を急いで參りました所が、途中で、一人の一寸法師(皆さん、よく御存じでしょー、あの小さな〳〵小人のことです)に出遭ひました。不思議そーに、太郎丸を見て、

『まー、なんだって、そんなに急いで行く』

と聞くのです。太郎丸は、馬の上から、じろ〳〵見下しながら

『なんだ、貴様は、一寸法師じやないか、一寸法師なんか、何を知つて』

と言ひ放つて、其儘、馬を進めて通り過ぎました。所が、其一寸法師といふのは、元來魔法使ひなのですから、太郎丸からこんなに輕蔑されて、大變に腹を立てゝ、よし〳〵夫なら、今にひどい目に遭はせてやらうといつて、何か呪詛をしましたのでさー太郎丸の方では困つた。といふのは、丸っきり、道が分らなくなつてしまつたのです、行つても、行つても、道がだん〳〵狹くなる許りで、終ひには、馬を進めることも出來なければ、後に戻すことも出來ないで、とゝ〳〵馬に乘つた儘、道のない所に立ちすくんで仕舞ひました。

こういふ事があらうとは知りませんで、殿様ば、今日か明日かと毎日〳〵太郎丸の歸りを待っておいでゞしたが、いつまで待っても太郎丸の歸りがありません。すると二番目の次齊と申すのが

『お父様、今度は、私に生命の水を取つて參ることを御宥し下さいませ』

と申し出ました。然し、この次齊も、實は、眞實にいゝのではありません、心の中では『太郎丸はきっと何所かで死んだに違ない、すれば後は皆己の物だ』なぞと考へて居るのです。始めは殿様は、中〻宥してくれませんでしたが、次齊のたっての願に、そんならば といふので、と一〳〵宥してくれましだ。

そこで。次麿は亦馬に打ち乘って、御殿を出でゝ前に太郎丸が行ったと同じ道を通って。何處をあてともなく進んで行きました所が、又々、前の一寸法師が出て來まして、

『そんなに、急いで何處へ行く』？

と尋ねましたが。次麿も、太郎丸と同じ樣な調子で

『なんだ、貴樣は、一寸法師じゃないか、一寸法師なんかには用があるもんか』

といったなり、見向きもしないで、驅けて行きました。すると、一寸法師は、又腹を立てゝ、忽ち、咒詛をしましたから、次麿は又分らない道に、馬を乘り込んで仕舞って、前へも後へも動くことが出來なくって、全く太郎丸と同樣に、馬に乘ったな

り立ちすくんだ儘、動けなくなって仕舞いました。

御殿では、こんな事とは知りませんで、殿樣が、毎日〳〵次營は〳〵といって、歸りを待って居ますが、一日立っても二日たっても歸って來ません。二人が二人まで、まー、どうした事だかと、歎いて居られましたが、三番目に、一番末の弟の三郎といふのが

『今度こそは、是非、三郎を遣って頂戴』

といって、中々聞きません、殿樣は、もー、太郎丸と、次營とに、こり〳〵して居ますから、『どうして、此上、三郎までやって堪るものか、己は夫よりか、いっそ死んで仕舞ふから』といて、中々宥してくれませなんだが、『どうか〳〵』といって、し

きりに三郎が願いますから、『では、致し方がない』といって、と一〳〵ゆるしてくれました。

そこで三郎は大喜びで、すぐ支度をして馬に乗りました。固より、生命の水は。何處にあるのか、どう行ってよいのかも知らないのだけれど、何てもたゞ思ふ方へ〳〵と遣って行けば、終には目的を達することが出來ると考へて、ずん〳〵進んで行きました。所が、途中で又例の小人が來て、前と同じ樣に、どこへ行くと尋ねましたので、三郎は、馬を止めて

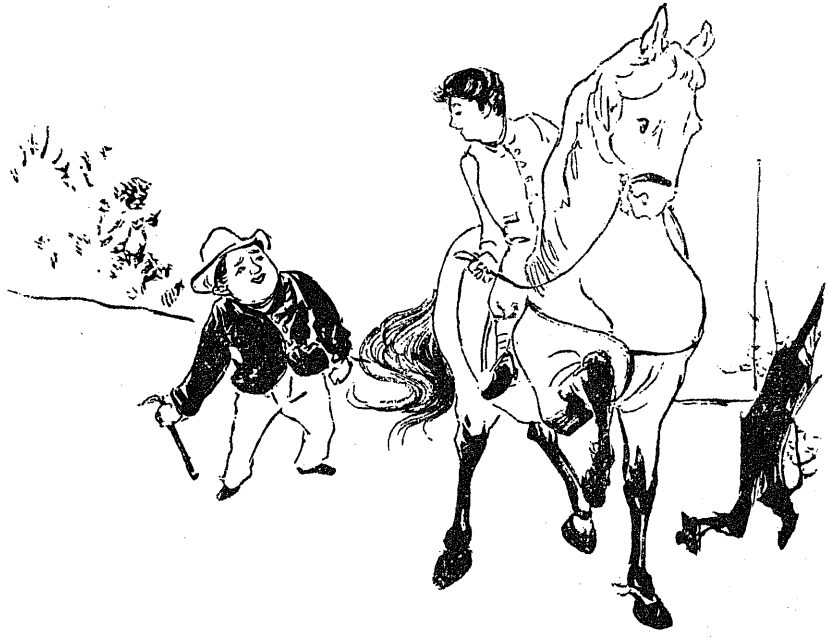
三郎『オー、誰かと思ったら一寸法師さんか、私は、これから、生命の水を取りに行く所だ、お父樣が御病氣で危篤なんだから、』

一寸『ふーむ、なる程然し、三郎、お前は、其水の在る所を知っ

て居るのか』

三郎『イーエ、實は夫を知らないから困って居るので』

一寸『ハー、夫じや仕方がない然し、待てよ、お前は、今迄の二人と違って、中々



十二

丁寧だから、己が一番、其水の在りかを知らせてやらう、こうだ、其生命の水はな、此山奥の魔城の中庭の泉から流れ出して居るのだ然し其城の中

へは、誰も入り込むことが出來ない、たゞこれだ、この鉄の杖と、こゝに二片の麵麭がある　これさへ持って行けば　大丈夫だ、』といって　自分の持って居た鐵の杖と、袂から、麵麭を二片取り出して、夫を三郎に呉れて、

『この杖で以て、城の鐵門を三度打つと、門の扉が獨り手に開くのじや、門の中には、獅子が二匹大口を開いて居るから、其麵麭を一片づゝ其口の中へ投げ込んでやると、二匹とも靜まって仕舞ふ、それから、大急ぎで、其生命の水を酌んで、十二時が鳴って仕舞ふ前に出て來んければいかぬ、十二時打って仕舞ふと、鐵門が閉ぢて、もーそれなり、お前は出られなくなるから』といって、丁寧に、教へてくれました。

《つゞく》